法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-05-09

「当事者性」の獲得を目指して

比屋根，照夫

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
38
(開始ページ / Start Page)
279
(終了ページ / End Page)
284
(発行年 / Year)
2012-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008001

Hosei University Repository

「当事者性」の獲得を目指して

比屋根　照　夫

屋嘉比さんを亡くしてからのこの一年余。私の心の深い空洞は今も埋まらない。それは沖縄近現代史を全体的に俯瞰し、「復帰前世代」と「復帰後世代」をつなぐ重要な研究者、思想者を喪った悲哀である。そのこともさることながら、何よりも比嘉春潮以来の「沖縄民間学」の思想的継承者の器量を持ち、その方向に沖縄学を切り開く「未完」の思想者・歴史学者を亡くした喪失感である。というのも、既存のアカデミズムから自らを峻別した屋嘉比さんの重要論稿は、在野時代に多産され、それらは既成の近現代史研究とは距離を置いた独自の道を模索したものとなっている。今はそれに深く立ち入る余裕はないが、そのなかで、彼が渉猟したのは沖縄近現代史の諸問題であり、比嘉春潮が伊波普猷以後の沖縄近現代史を点検した姿勢と通ずるものがある。屋嘉比さんの長い在野時代と、ようやく本格的な研究生活についた途端の重病と急逝――。まさに豊穣な沖縄研究の沃野を目前にしながらの夭折であった。「夭折（ようせつ）」という言葉がこれほど痛烈な意味をもって迫ってきたのは、私だけではあるまい。その意味で、沖縄近現代史研究は比嘉春潮以来の最も良質な「沖縄民間学」、思想史研究の

Hosei University Repository

継承者を喪った。沖縄近現代史研究はこれからどこへ向かうのか。「同世代」の研究者の幾人かから「沖縄近現代史研究の座標軸」を喪ったとの悲嘆に近い声を聞くと、その喪失感の大きさが実感される。

それにしても、この緊迫した政治状況で彼はどのような思想を発信し、辺野古・高江へと動きまわっていたかを今は痛切に思う。全方位的な戦略の布陣を立てながら、たぶん屋嘉比さんは穏やかに、鷹揚に沖縄の運命とぎりぎりの形で向かい合っていたであろう。思想者として、行動者としての知行合一、屋嘉比さんとはそんな「穏やかで沈着な歩行者」であった。

ここに拙い屋嘉比さんあての電文の原稿が残っている。彼の若い同志たちが企画した出版を祝う会あてに、出張前夜に書いた電文であるが、そこに屋嘉比さんへの私の共感が凝縮されていると思われるので、ここに引用することを許していただきたい。

緊迫した政治状況を目前にしながら、私はあらためて屋嘉比収さんの高い志とその労作にこもる内燃した抗議の意思に深い共感を押さえることができません。並みの言葉で祝辞など申し上げられないほど、私は屋嘉比さんの仕事に魂をゆり動かされています。私達はこの時代にどう生きるべきか、何を手放したらいけないか、を貴兄の仕事は啓示しています。状況に流されず、しかも状況の真只中で貴兄が発する内なる声は、沖縄の深部を底流する「回天」の志のように思えるのです。ここに一首。

Hosei University Repository

清々しき青年の書よ濁世を打ち
蒼穹に満つるは憤怒の声

二〇一〇年十二月六日　　比屋根照夫

後日、屋嘉比さんから「お礼状」が届き、こんな書き込みがあった。「重厚な文章による激励の電報に感激いたしました。先生のご厚情に重ねて感謝申し上げます。ありがとうございました」。

病が重篤であることを伝え聞いていただけに、この文章はまさに落涙、落涙そのものであった。思えば屋嘉比さんの急逝は沖縄で研究者として生きる者が辿る生き方の極限的な方向を示唆していたと思われるのである。沖縄の研究・現実の総てに「憂い」を抱き、それらに「異議申し立て」をし、「現実」と「歴史」の矛盾を鋭角的に衝いたのが屋嘉比さんの学問・研究であった。それゆえに屋嘉比さんの批判は、沖縄の「現実」に妥協し、それを合理化する「言説」への仮借ない批判となって表出したのであった。

さて、思い返してみると、一九七〇年代後半以降、東京大学教養学部から沖縄国際大学へと地域主義の思想を実践すべく異例の赴任をした玉野井芳郎先生の下で、強い影響を受け、先生の学風を慕っていた屋嘉比さんは、沖国大時代を玉野井ゼミで積極的に活躍したとのことである。玉野井先生のあ

Hosei University Repository

の七二年以後の混屯たる状況での新鮮な言論活動、平和百人委員会の結成、環境保全活動等々に区切りをつけて、新しい赴任先である明治学院大学に移動することになった時、屋嘉比さんは先生と同行して同学院で勉学することになっていたとも聞いていた。

玉野井先生の急逝で、その前途を模索していた屋嘉比さんが、琉球大学大学院法学研究科の第一期生として入学したのは一九八七年の春であった。屋嘉比さんを含めて、秋山勝（沖縄大学地域研究所特別研究員）、清水澄子（編集者）のような沖縄研究を志す外来者、豊見山和美（沖縄県公文書館専門員）、玉木園子（沖縄県立図書館専門員）を含めて、この初期の院生は学年を異にしながらも個性的な人物が多く、私のゼミはしばしば白熱的な議論の場となった（括弧内は現職）。そのころの屋嘉比さんは沖縄研究のテーマをどこに見定めるか、ということに強い関心を持ち、悩んでいるかに見えた。すでに、さまざまな時事的な問題にも積極的に発言し、八〇年代以降、『沖縄タイムス』などにも論文を発表していた。

そんな屋嘉比さんとの対話の中心は、沖縄思想史研究の今後のあり方についてであった。伊波普猷をその時代の突出とするのではなく、明治末期の伊波以降の島袋全發などの後発の人物群像を視野に入れながら、沖縄人物史の研究をやるべきではないか、ということであった。屋嘉比さんはそんな討論の末、「沖縄方言論争」、なかでも伊波の後続世代・島袋全發に関心を向けていった。私はこのテーマに全面的に賛成すると同時に、全發以外の伊波月城など明治沖縄思想史の後発世代の相関性に注目

Hosei University Repository

すべきと屋嘉比さんに助言した。

屋嘉比さんの修士論文は膨大なものであったが、そこには「沖縄方言論争」問題と島袋全發論が見事に捉えられ、伊波・東恩納以後の沖縄研究の世代的差異の問題が思想史的に生き生きと捉えられていた。琉大の大学院での研究生活は、彼が研究者として生きる一里塚になったことは間違いない。そのことについては、屋嘉比さん自身がその著『〈近代沖縄〉の知識人――島袋全発の軌跡』（吉川弘文館、二〇一〇年）の「あとがき」で告白している。

こうして屋嘉比さんは、琉大の修士課程を修了した数年後、九州大学大学院の博士課程に進学することになった。この人生上の転換は当然のことながら、彼の思想史への問題意識を深める結果となった。九大スタッフとの研究交流のなかで屋嘉比さんの問題意識は、沖縄から広く日本全体を見渡す視野を獲得したと私には思われる。そのころの屋嘉比さんは在野時代とは違って、研究者としての道を本当に歩みだしていた。博多の夜、九大の石田正治さん、新川明さんらと生き生きと話し合った夜のことが忘れがたい。

さて、最後になったが、屋嘉比収さんが提起した問題は何であったかを考えてみたい。遺された仕事にはさまざまな問題提起がなされているが、「当事者性の原理」こそ屋嘉比さんの思想的根幹であったと思う。当事者性とは、過去と現在の対話を一体化することであり、同時に過去の経験を生身のままに受動し、そこから現在へと問題を発信する能動的な主体性のことである。屋嘉比さんの代表

Hosei University Repository

的な著作『沖縄戦、米軍占領史を学びなおす――記憶をいかに継承するか』（世織書房、二〇〇九年）は、まさにそうした当事者性の原理が貫徹された著書である。さまざまな戦争体験、さまざまな戦後体験。そのような沖縄の血みどろな歴史を、戦後史家は、どう自己の体験として感受し、行動に立ち上げることが出来るか――。

これが屋嘉比さんの戦後思想史の出発点であるように思う。本書にはそうした屋嘉比さんの志向がさまざまな戦後史の局面で渦巻いている。ひとことで言えば、歴史家は過去をどう引き受けてどう生きるべきか、屋嘉比さんが問うたのはそのことだ。そのように真摯に生きた屋嘉比さんがもうこの世に居ない。暗然たる思いが残るのみである。